

本能寺蔵『落葉百韻』訳注(二)

伊藤伸江・奥田 勲

本稿は、科研費基盤研究C「心敬の文学作品における創造と新撰菟玖波文学圏への影響についての総合的研究」(研究代表者伊藤、研究分担者奥田)の一環として行なっている「『落葉百韻』訳注(二)」である。注釈は「『落葉百韻』訳注(一)」と同じく伊藤が下原稿を作成し、奥田とのメール会議及び複数回の対面会議で意見交換、討議を行ない、その結果を完成原稿にまとめている。

凡例

一、底本は本能寺蔵某年十月二十五日賦何人百韻(『落葉百韻』)である。該本は孤本であるため対校本はない。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。原文は百韻の翻刻に示してあり、適宜参照されたい。原文の表記の誤りと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記した。

一、各句には、百韻全体の通し番号を句頭に示し、参考として、各懐紙内でのその句の所在を懐紙の順、表と裏の別、表裏ごとの句の番号で表し、前句を添えた。

一、語釈にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献に依る。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じて平仮名に改めた。

一、各句には、**【式目】****【作者】****【語釈】****【現代語訳】**の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのよう
に作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮し**【現代語訳】**の他に**【付合】****【一句立】**の項目
を設けた。さらに必要な場合には**【考察】****【補説】****【他出文献】**の項目も設けた。

※本訳注（二）の引用文献典拠一覧及び参考文献は、同時に刊行される『愛知県立大学日本文化学部論集国語国文学
科編 第一号』掲載の訳注（二）の引用文献典拠一覧及び参考文献を兼ねる。また本百韻の翻刻も同論集に掲載し
ている。

（初折 裏 七） うきをたつきに世をすつる道

一五 あらましにさそはれそむる墨の袖 正頼

【式目】 雑・述懐（あらし・墨の袖）

【作者】 正頼。句揚の末尾に名を記され、出詠数も四句で執筆について少なく、連歌に関しては巧者ではない。井上宗雄氏は、『新撰菟玖波集』に二句入集している平正頼（細川高国家人）か、もしくは正頼という名の僧か（正徹の弟子か）と推定する（『康正三年武家歌合』解説）。正頼の名は、この『落葉百韻』以前には、『享徳千句』（享徳二年（一四五三））、『康正三年八月十三日何路百韻』（二四五七）に見られ、いずれも百韻に三〜四句出句し、『康正三年九月七日武家歌合』に正徹、心敬、正広らの名と共に見られる。この百韻以後は、『明応三年十月晦日何路百韻』（一四九四）、『東山千句』（永正十五年（一五一八））（第六百韻にて発句を詠む）に名が見られるが、これらの詠者は、永正十七年（一五二〇）に没

した河原林対馬守正頼である。河原林正頼が、仮に七十歳で没したとすると、生年は享徳初年頃(一四五〇年頃)となる。それゆえ、『落葉百韻』の正頼は河原林正頼とは別人であり、享徳、康正年間頃に名が見える、正徹周辺の人物と思われる。

【語釈】 ●あらまし そのようにありたいと願う期待。ここは、世のうれわしさを逃れて静かに暮らしたいと願う気持ち。「あらましの心の末はそれながらおもはぬ山にすみぞめの袖」(新続古今集・雑中・一八七四・栄仁親王)。「述べ懐の心、有増」(連珠合璧集)。「捨ぬべき世やあらましに過すらん/いたづらに聞入相の声」(熊野千句第七百韻・二一〇二・元説/常安)。●さそはれそむる 誘われて心が動きはじめ、入りこんでいった。「そむる」の部分、「墨」の縁。「墨染トアラバ、衣袖などにいふべし。又只墨の袖 墨の衣ともいふ。染」(連珠合璧集)。●墨の袖 墨染の僧衣。「法の師にいましほと墨の袖夕にそむるかねの声かな」(松下集・薄暮鐘・九六〇)。なお、『草根集』永享二年十二月三日詠の詞書に「海印寺の僧正、弟子の持宝禪師に華嚴宗管首などゆづりて、ひたすら墨の袖のやうになりて、萱ぶきの所作てかたはらにこもりゐられたるよし聞き侍りて、まかりとぶらひし」とあり、「墨の袖」は僧綱と関係がない遁世のありさまをさすか。

【付合】 「世を捨つる」に「墨の袖」が付く。

【一句立】 世を逃れたいと願う気持ちに心が動かされ、墨染の僧衣をまとう身になった。

【現代語訳】 (前句 つらいと思う気持ちをきつかけとして入る、世を捨てる道であることよ。) 世を逃れたい気持ちに心が動かされ、墨染の僧衣をまとう身となっていったのだ。

(初折 裏 八) あらましにさそはれそむる墨の袖

一六 ゆふべの鐘のなみだとふ聲 心敬

【式目】 雑・述懐(涙) 夕べ(一座二句物・時分) 鐘只一 入逢一 尺教一 異名一(一座四句物)

【作者】 心敬

【語釈】

●夕べの鐘 夕暮れ時につく寺院の鐘。「鐘トアラバ、ゆふべ こゑ」（連珠合璧集）。この言い回しは、一般的な歌語のように思えるが、実は正徹が特に多用する、いわば正徹の特異語句であることは注意してよい。同類の語句で広く用いられる歌語に「入相の鐘」があり、おそらく同義と考えられてきたようだが、正徹は区別していたようである。心敬もその考えをうけついでいるか。「嵐ふく夕の鐘の声おちて松につれなき峯の白雪」（草根集・雪夕鐘・一一六八・永享元年正月十日詠）。「あらましの身に送る哀さ／聞き果てぬ夕の鐘に寢覺して」（竹林抄・雑上・一二四〇・無表記（心敬））。夕べの鐘は、音の中に仏法の教えを内包する。「しづかにて夕の鐘のことはりをき、いる、人や涙おつらん」（草根集・晚鐘・二五四五・文安四年八月廿七日詠）。「ききしらぬみみにもふれよりのこゑ／ゆふべのかねにかへるつりふね」（新撰菟玖波集・雑二・二七六〇／二七六一・三條西実隆）。●涙とふ 鐘が聞こえてくることを「とふ」と詠み、鐘が袖の涙を訪れることをいう。和歌においては、袖の涙を訪れる景物は、月や秋風、時雨などであり、鐘は珍しい。●（鐘の）声 鐘の音。聞いた時に、意味を持って、心情に訴えかけてくるように思われる音を表現する言い方。「鐘の声」を、訪ねてきて心にある感情を呼びおこす力を持つものとしてとらえている、この感覚は正徹の和歌に感じられ、心敬も継承していることがわかる。「枕とふ暁のかねの声たえてこたへん方もなき思かな」（草根集・暁鐘・一〇二四七・長祿二年二月八日詠）。

【付合】 前句の「墨の袖」から、「袖」に「涙」を付けた。「涙トアラバ、袖衣手」（連珠合璧集）。「墨染の衣の袖は雲なれや涙の雨のたえず降るらん」（拾遺集・哀傷・二一九七・よみ人しらず）。「墨」の黒さから夕暮れの薄暗さを連想し「墨の袖」に「夕」も付けている。「墨染トアラバ、衣袖などにいふべし。又只墨の袖 墨の衣ともいふ。夕」（連珠合璧集）。この句は、前句の言葉と緊密に関係しあった言葉でつくられているが、「涙とふ」と、「とふ」を使用することで、恋のイメージを暗示する語句を入れている。「恋の心、待 とふ」（連珠合璧集）。次句から句境の変化をうながしたい心敬の配慮である。

【二句立】

夕暮れの鐘が泣きぬれている私の耳に聞こえてくる。

【現代語訳】(前句 世を逃れたい気持ちに心が動かされ、墨染の僧衣をまとう身となつていった。)そんな私なのに、出家をしてもやはり物思う涙にくれている。そうした私の耳に、み仏の教えを伝える夕暮れの鐘の音が訪れ、物思いはさらに深まるのだ。

(初折 裏 九) ゆふべの鐘のなみだとふ聲

一七 暁に月のなるまで猶待ちて 利在

【式目】 秋(月) 恋(待ちて) 暁(時分) 光物(月)

【作者】 利在

【語釈】 ●暁に月のなるまで 月が、暁の様子になるまで。「暁」を「暁の月」をさす語として心が使用している下記のような例がある。「袖しほるかりねの夜はの松の風／きぬくさむみのこるあかつき 別つる跡に、いまだあかつきものこり侍れば、なくなかうちふして、むなしき床の松風、身にしみとをり侍るさまなり」(芝草句内岩橋上)。「暁の月になるまで」が自然な言い方であろうが、前句の「鐘の」に対して「月の」として「ゆふべ」と「暁」、「鐘」と「月」を対にした形であろう。またあるいは「暁」に「明月」(あかつき)と掛けた言葉の遊びもあろうか。「あかつきになる」は、「このよをしるもただあきのくれ／ほどもなくあかつきになるつきをみて」(基佐集(静嘉堂文庫本)・四三五／四三六)。「暁月」(暁に空に見える月)であれば、連歌に用例が多い。なお、「暁」と「月」と、「つき」が重なり同字である。●猶待ちて 夕暮れから明け方まで待ち暮らしたことをいう。「わきてゆふべは風ぞ秋なる／うき人の来ぬにつけても猶待て」(菟玖波集・恋上・七九一・救済)。

【付合】 前句の「夕べ」に「暁」で対した付合。前句の「涙」を恋の涙とし、夕暮れ時に恋人を思い涙しており、さらに、あきらめきれず一晚中待ち、暁時になった様子を詠む。来ない恋人の訪れを待つ夕暮れ時に聞く鐘の音は「たのめてもこぬ人をまつ夕暮に心をつくす入逢のかね」(続千載集・恋三二・二九七・右兵衛督隆長)、待ち続ける様は「こぬ人をか

ならずまつとなけれども暁がたになりやしぬらん」（金槐集・恋・五一六）。ついに恋人と別れる時間にもなってしまう様は、「待わびてねよとのかねの行末をおもふもかなし衣々のこゑ」（芝草句内岩橋下・兼厭暁恋、心敬集一六六）。鐘の声に使われた「とふ」が、恋人が来ないさまをきわだたせる。

【二句立】 月が暁の様子になる、そんな頃まで、猶も待っていて。

【現代語訳】（前句 夕暮れの鐘の音が、来ないあの人を思い慕う涙にぬれている私を訪れてくる。）鐘の声は私を訪れても、あの方は姿を見せず、月がもはや暁の月の様となっても、私はむなしくあの人を待つていて。

（初折 裏 一〇） 暁に月のなるまで猶待ちて

一八 たがきぬぎぬの秋うらむらむ 隆蓮

【式目】 秋（秋） 恋（きぬぎぬ うらむ）

【作者】 隆蓮

【語釈】 ●きぬぎぬ 逢瀬の後、女性のもとから男性が帰ること。「たがきぬぎぬ」は、自分の恋人が心変わりして別の人を訪れて、その人のもとから帰る後朝をいう。用例には「思ひいでよたがきぬぎぬのあかつきもわがまたしのぶ月ぞみゆらむ」（千五百番歌合・恋・二五二・藤原定家）、「うき身ゆゑいそぎし鳥のおなじねをたが衣衣に君かこつらん」（南朝五百番歌合・八七五・花山院長親）がある。なお、定家の歌は「秀逸にはみえ待らぬうへに、月の字かさなりてはべり、暁は別事なれば、同心病にはあらずや」と酷評されていた歌である。「花にねて誰きぬぐぞ朝あらし」（心玉集拾遺・一六八一）。●秋うらむらむ 「秋」と「飽き」を掛ける。恋人に飽きられたのをうらんでいることだろう。「らむ」は、自分をうらぎった恋人が通う女性が、また同じく恋人に裏切られている状態についての推量。

【付合】 前句の「暁」に「きぬぎぬ」と付けた。「暁トアラバ、衣々」（連珠合璧集）。また、一句の中で「衣」に「恨」と縁のある語句を用い、「秋」は「飽き」と掛けている。

【一句立】 誰が、秋の後朝の朝の別れの時に、恋人が自分に飽きてしまおうことを心配し、苦しんでいるのだろう。逢瀬に感じとった相手の心変わりの兆候への懸念を詠む。「きぬぎぬ」と「秋」を併せ詠む歌に「おもひさへ猶身にしみてきぬぎぬの袂にたへぬ秋風ぞ吹く」(前撰政治家歌合嘉吉三年・秋別恋・四一〇・従三位仲方卿)等。

【現代語訳】(前句 来てもくれない恋人を、やはりあきらめきれずに、月が暁の空に浮かぶようになるまで待っていて。)だが、その同じ秋の暁方に、恋人は別の人との後朝の別れをしている。そんな彼のことだから、その彼の浮気相手の女だつて、後朝の別れに際して、恋人の心変わりを感じとって、私と同じようにうらめしく思っているだろう。

(初折 裏 一一) たがきぬぎぬの秋うらむらむ

一九 虫だにも思ひある夜に鳴きよわり 三位

【式目】 秋(虫) 恋(思ひ) 夜分(夜) 虫(一座一句物)

【作者】 三位

【語釈】 ●虫だにも 虫でさえも。自分はまして虫よりも。「虫トアラバ、なく よはりはてたる」。●思ひある夜 「思ひある」という表現は、『伊勢物語』第三段の和歌「思ひあらば葎の宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも」が淵源である。「きく人もおもひあるよのねざめかなむぐらのやどにころもうつこゑ」(雅有集・擣衣・四九二)。「思ひあるねをこそたつれ蜚よるはほたるのもえし草葉に」(草庵集・虫・四七六)。また「夜」と「世」を掛ける。●鳴きよわり 「鳴き」と「泣き」を掛け、虫と我が身をくらべる。「わがごとくなきよわり行く虫の音はあきはつる身や悲しかるらん」(風葉集・秋下・三五九・わたらぬ中の承香殿女御)。

【付合】 前句とあわせ、恋人の心変わりの気配を感じ取ったかのように、夜の内に鳴き弱っていく虫の様子を詠む。「虫だにも」とすることで、悲しみに弱っていく女心を示唆する。

【一句立】 虫でさえ、心配事のある夜には声が弱くなっていくものであつて。

【現代語訳】（前句 今は別のひとの後朝の別れをしている、そんな浮気な恋人のことだから、その彼の浮気相手の女だつて、後朝の別れに際して、恋人の心変わりを感じとつて、私と同じようにうらめしく思っているのだらう。）虫でさえも、物思ふ夜に、鳴き声が次第に弱々しくなつていく（まして、虫ならぬわが身は、恋しいあの人の心変わりを思い悩む夜をすごせば、泣きぬれ弱りはてていくのだ）。

（初折 裏 一二） 虫だにも思ひある夜に鳴きよわり

二〇 むぐらの宿にたへてすむころ 円秀

【式目】 雑（葎） 植物（葎） 居所（宿）

【作者】 円秀

【語釈】 ●むぐらの宿 葎（むぐら）は、蔓性の雑草。広く生い茂り、叢をつくる。「むぐらの宿」は、むぐらが生い茂った荒れた家。「むぐらのやどはすみうかるべし／おもひある身にさへ秋の月をみて」（菟玖波集・雑一・一一三四・権僧正良瑜）。●たへてすむ ころえながら住む。ここは「葎の宿」の、荒れはてて、人も来ない荒涼とした寂しさに耐えて住む。「たへてすむ心のみちはあるものをとはずはしらじよもぎふのかけ」（雪玉集・幽居・八〇六八）。●すむころ 住んでいる時期。「あきかせのはやき山べにすむころはとふ事のはもかれはてにけり」（元良親王集・八四）。

【付合】 前句の「思ひある」に「葎の宿」を付けた。「思ひあらば葎の宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも」（伊勢物語第三段）と、「たへてやはおもひありともいかがせむむぐらのやどの秋の夕ぐれ」（新古今集・秋上・三六四・藤原雅経）が本歌となる。「葎の宿に思あると付事、伊勢物語に」と、『連歌寄合』も付合の根拠にこの二首を指摘する。

【一句立】 葎生い茂る荒れた家に、寂しさをこらえながら住んでいる頃。

【現代語訳】（前句 虫の声さえも、もの思うことある夜には、次第に弱々しくなつていく。まして、私も物思いに泣き濡れ、気持ち弱つてきている。）葎生い茂る荒れた家に、寂しさをこらえながら住んでいる頃には。

(初折 裏 一三) むぐらの宿にたへてすむころ

二一 昔のみ高き蓬にへだたりて 伝芳

【式目】 雑・懐旧(昔) 植物(蓬)

【作者】 伝芳

【語釈】 ●昔のみ 昔ばかりが。「なさけありしむかしのみ猶忍ばれてながらへまうき世にもふるかな」(新古今集・

雑下・一八四二(西行))。●蓬 「高き蓬」は蓬が生い茂り、荒廃したさま。蓬がひどく茂った荒れはてた家は、『源氏物語』

蓬生巻の末摘花の邸の描写に見られる。「浅茅は庭の面も見えず、しげき蓬は軒をあらそひて生ひのぼる。葎は西東の御

門を閉ぢ籠めたるぞ頼もしけれど」と、浅茅に蓬、葎が邸の荒廃ふりを表している。「蓬生の宿」(光源氏)一部連歌寄合

蓬生)。蓬の丈が非常に高くなる様は、「こぬ人をおもひたえたる庭のおものよもぎがすゑまつにまされる」(新古今集・

恋四・二二八七(寂蓮))が、松の背丈よりも高くなると詠み、「待つ」(＝松)よりつらさがまさったことを表現している。

【付合】 前句の「宿」に「蓬」を付ける。「蓬トアラバ、宿よもぎふに」(連珠合璧集)。また、「葎」と「蓬」を対する。

【一句立】 今となつては、高く生い茂った蓬にさえぎられるかのように、往時は遠く隔たつていて。

【現代語訳】(前句 葎生い茂る荒れた家に、我慢して住みつづけている頃には。)往時は、この荒れた家の丈高く茂つ

た蓬にさえぎられるかのように、遠く隔たつていて。

(初折 裏 一四) 昔のみ高き蓬にへだたりて

二二 霜の色そふ髪のはれさ 昆親

【式目】 冬(霜) 述懐(あはれさ) 霜(降物)

【作者】 昆親

【語釈】 ●霜の色そふ 霜のような白い色が加わった。霜のように白くなった乱れ髪のことを「霜蓬老鬢三分白」(和

漢朗詠集・菊・白居易」と表現する。「蓬髪」は、蓬が生い茂っているかのように、整わない頭髪のこと。「あざごこのよもぎが色にます鏡我が白髪にむかふ霜かな」（心敬集・朝霜・五九）。

【付合】 前句の「蓬」に「髪」を付けた。「蓬トアラバ、髪」（連珠合璧集）。「髪を付は、蓬の乱れたるは髪に似たり。法花経に、頭髮蓬乱」（『連歌寄合』）。

【一句立】 霜のような白い色が加わった、我が髪の毛の様子をなんとせつないことよ。

【他出文献】 「霜となりぬる髪の寒けさ／くしのはに風の音する冬の空」（心玉集一二四二／一二四三）。

『心玉集』では「霜の色そふ」が「霜となりぬる」、「髪のあはれさ」が「髪の寒けさ」となっている。文正元年（二四六六）『心玉集』自撰の際に改めたものであろうか。白髪となつてしまった髪の寒々しい様子を表す「霜となりぬる髪のさむけさ」ならば、一句が霜の白のイメージで統一され、より緊密に結びついた表現となる。

【現代語訳】（前句 昔の様子とは、生い茂つた蓬にへだてられて違つてしまった。そんなふうには、我が髪は、昔とはうつてかわつて衰え、蓬のように乱れて生えていて。）その上、蓬に置く霜のような白い色が加わつた髪のの様子のなんとせつないことよ。

（二折 表 一） 霜の色そふ髪のあはれさ

二三 櫛のはに風も音する冬の空 心敬

【式目】 冬 風（吹物） 風與風（可隔五句物） 空空だのめなど云ては此外也（一座四句物）

【作者】 心敬

【語釈】 ●櫛のはに 「齒」に「葉」を掛けている。「櫛」を「玉串」と掛けて「葉」をイメージしての句作か。「櫛トアラバ、はをしげみ」（連珠合璧集）。「櫛の齒」という語句の和歌における用例は、『草根集』と『松下集』に各一例見えるが、非常に珍しい。「くろかみもとりて（類題本「とかで」）日ぞふる櫛のはをひくよりしげき恋のみだれに」（草根

集・寄櫛恋・六三二〇・宝徳二年四月九日詠、「くしのはを心に引きてかよへどもわがてにかくる黒髪もなし」(松下集・寄櫛恋・三〇五三)。だが、いずれも「櫛の齒を引く」という、絶え間のないことを言うことわざを詠みこんで、恋歌をつくりあげており、この句とは趣が違う。毘親の前句は霜で白髪を表現しているゆえに、この句は老人のまばらで整わない髪をすく櫛のイメージである。●風も音する 髪が櫛に引つかかり音がするのみならず、風も音をたてる。「櫛の齒」と結びつく「引く」を、風ゆえに「音する」としたのである。ここは漢語「櫛風沐雨」(身を風雨にさらし奔走して苦労すること)からの連想もあろうか。『日本書紀』欽明天皇六年冬十一月に「櫛風沐雨、藉草斑荊」(風にかしらげづり雨にゆするあみして、かやをまくらししばをしきみにする)と百濟での苦を語る。

【付合】 前句の「髪」に「櫛」、「霜」に「冬」を付ける。「冬の心、霜」(連珠合璧集)。

【一句立】 吹く風も櫛の齒の間を吹き通って絶えず音をたてている、そんな寒々しい冬の空よ。

【現代語訳】 (前句) 霜のように白い色が加わった髪の毛の様子のとせつないことよ。髪が櫛の齒に引つかかり音をたてるのみならず、枯れ葉を吹く風も櫛の齒の間を吹き通って絶えず音をたてている、そんな寒々しい冬の空よ。

(二折 表 一) 櫛のはに風も音する冬の空

二四 たなびく雲やまよひ行くらむ 日明

【式目】 雑 雲(聳物)

【作者】 日明

【語釈】 ●たなびく雲 横に薄くかかる雲。「たなびく」は、前句の「櫛の齒」による諺「櫛の齒を引く」からの連想であろうか。「目さまして鳥鳴きたつさよ風に／たなびく雲ぞ空にわかる、」(葉守千句第一百韻・五五／五六・恵俊／宗恕)。●まよひ行くらむ 「雲トアラバ、まよふ」(連珠合璧集)。「山路いづくと迷ひ行くらん／古郷のなごりとおもふ峰の雲」(紫野千句第八百韻・一四／一五・相阿／真泊)。

【付合】 前句の「風」により、雲が横に流れ、あてもなく動くさまを詠んだ。

【一句立】 横ざまにかかっている雲は、あてもなく迷っていくのだろうか。

【現代語訳】（前句 髪が櫛の齒に引っかかり音をたてるのみならず、枯れ葉を吹く風も櫛の齒の間を吹き通って絶えず音をたてている、そんな寒々しい冬の空よ。）風に流れる横雲は、あてもなく迷っていくのだろうか。

（二折 表三） たなびく雲やまよひ行くらむ

二五 夕立の晴れぬるあとは涼しくて 貞興

【式目】 夏（夕立） 夕立（降物・一座一句物）

【作者】 貞興

【語釈】 ●夕立 夏の午後に、短時間に激しくふる雨。「すゞしきは夕立はる、庭たづみ月をみだしてさ波吹風」（草根集・夏月涼・六一五八・宝徳元年十二月廿一日詠）。「たゞ一頻ゆふだちの雲／入かたは日かげなれども涼しくて」（菟玖波集・夏・二五八・二品法親王）。

【付合】 前句の「雲」に「晴れぬる」とつけ、夕立を降らせた黒雲が散り散りになっていくさまとした。「夕立トアラバ、雲もとまらぬ」（連珠合璧集）。夕立後の清涼感がこの句の焦点。

【一句立】 夕立の晴れた後は、あたりは涼しくなつて。

【現代語訳】（前句 空にたなびく雲は、迷いきえていくのだろうか。）夕立の晴れた後は、あたりは涼しくなつて。

（二折 表四） 夕立の晴れぬるあとは涼しくて

二六 ひかげも夏の山の辺の露 有実

【式目】 夏（夏） 日（光物） 露（降物）

【作者】 有実

【語釈】 ●ひかげも夏 「ひかげ」には「日陰」と「日影」両意があるが、前句「晴れぬる」から「日影」、日差しとなる。「いなづまのひかりをそへて夕立の雲のとだえはひかげなりけり」(延文百首・夕立・六三三・尊胤法親王)。「夏」の「な」に「無(し)」を掛けるか。●山の辺の露 「山の辺」は山の近くのあたり。前句に詠まれた「夕立」のなごりの水滴を「露」とした。「露ふかき庭のあさぢに風過ぎてなごりすずしき夕立の空」(統拾遺集・夏・二〇八・藤原為教)。

【付合】 夕立が晴れた夏の午後、雨の雫のなごりの露に清涼感を覚えるさま。「夕立トアラバ、草葉に露すがる」(連珠合璧集)。日の差さない山裾には雫が露として残っている、それに気づいた驚き。

【一句立】 一句では、夏ではあるが、日の差さない山裾の光景。夏であるのに、日差しがないため、朝露が残る。「日影もしるく夏は来にけり／あふひにや神の心もなひくらむ」(老葉(再編本)・夏・二四五／二四六)。

【現代語訳】(前句 夕立が晴れた後は、あたりは涼しくなつて。)あらためて照りつける夏の日差しも山裾のあたりにはなく、夕立の雨の雫のなごりである夕露が残っていて。

(二折 表 五) ひかげも夏の山の辺の露

二七 氷室守都にいづる道すがら 忠英

【式目】 夏(氷室) 氷室(水辺・用) 都(一座三句物)

【作者】 忠英

【語釈】 ●氷室守 氷室の番人。氷室は、冬の間氷を切り出し、夏まで貯蔵しておく貯蔵庫。『八雲御抄』『凍』の条に「氷室は仁徳天皇六十二年五月額田大井彦皇子鬪鶏にかりする時皇子自山上見野有物 其かたち如虚 遣使令見水也 其時奏後始れり 茅萩をあつく草を其上にふくといへり」と、来歴と形状を説明する。●都にいづる 氷室は「山も所も木深き蔭の、日影もささぬ深谷」(謡曲・氷室)につくられた。平安京には、丹波国氷室山や京都の松ヶ崎、北山

などの氷室から氷が運ばれた。

【付合】 前句の「山」に「氷室」を付ける。「氷室トアラバ、山」（連珠合璧集）。前句の「ひかげ」は「日影」ととり、山を下りてきて、日差しも夏らしくなった様とする。その上で、前句の「露」は氷室から出した氷が溶けはじめて落ちた水滴と見た。「氷室山いだす氷のしづくかも露ふく野への風ぞすゞしき」（草根集・氷室風・六九一四・宝徳三年五月廿六日詠）。

【一句立】 氷室守は氷を献上するために、都に出る途中である。

【現代語訳】（前句 夏であっても日もささない山裾のあたりに、珍しくも宿っている露。）氷室のある山奥は、夏でも涼しいが、都に近づくにつれ、次第に暑くなる。そんな山裾の露は、実は、氷室守が氷を献上するために都に出る道々落とす、氷が溶けはじめた水滴の露なのだ。

（二折 表 六） 氷室守都にいづる道すがら

二八 とへば名にさへたかつなる里 利在

【式目】 雑 高津（名所） 里（居所・体）

【作者】 利在

【語釈】 ●たかつなる里 「高津」に「高し」を掛ける。「氷室トアラバ、高津宮（仁徳天皇を申。氷室の始也）」（連珠合璧集）。高津宮は仁徳天皇が難波に置いた宮の名称であり、今の大阪市の中央区あたり。二七句語釈に見たように、仁徳天皇の代に初めて氷室を各地に設営したことが、寄合とされている。

【付合】 前句の「氷室」に「高津」をつける。

【一句立】 高津の里は、尋ねればその名までも高い、ゆかりの里だ。

【現代語訳】（前句 氷室守が都に氷を運ぶ路の途中で）土地の名を尋ねれば、名までも高い、氷室ゆかりの地、高津

の里であるよ。

(二折 表 七) とへば名にさへたかつなる里

二九 まだ知らぬ旅に石見の国もつし 立承

【式目】 雑・羈旅(旅) 石見(名所)

【作者】 立承

【語釈】 ●まだ知らぬ まだ行ったことがなく知らない。「まだしらぬたびの道にぞ出でにける野原しの原人にとひつつ」(堀河百首・旅・一四五八・大江匡房)。●石見の国 現在の島根県西部。前句の「高津の里」を石見国に存する「高津」の地として付けた。「石見潟名のみたかつの浦さびて／風ふきしほる松ぞかたぶく」(享徳二年三月十五日何路百韻・七五／七六・忍誓／専順)。石見国高津は、現在の島根県益田市高津町。『正徹物語』に「人丸の木像は、石見国と大和国にあり。石見の高津と云所なり。此高津は、人麿の住給ひし所也。万葉に、石見野や高津の山の木間より我ふる袖をいも見つらんか」と云哥は、爰にて読給ひし也。是にて死去有ける也。」と記されており、万葉歌「石見乃也 高角山之 木際從 我振袖乎 妹見都良武香」(卷二・一三二)の「高角山」(現在の島根県江津市の東方、島屋山)はこの益田市高津の山と理解されていたようである。和歌や連歌に「石見国」を詠むものは、この句の他に管見に入らない。「石見潟」を詠む場合は、後に「言は(ず)」を付けたり、副詞の呼応から打消しを呼び込んだりする。「つらしともうしとも何かいはみかたそこいはみがた怨ぞふかき心ひとつに」(拾遺集・恋五・九八〇・よみ人しらず)、「つらしともうしとも何かいはみかたそこにふかめて世をばつくさむ」(耕雲百首・恨恋・七七)。「石見」のみでは、「言は」に続く否定の気持ちは薄くなるように思われるが、ここは「言は(ず)」を掛けると見ておく。「言は(ず)」は前句の「とへば」と呼応し、また前句、付句両方の地名が掛詞として並立する妙をねらう。

【付合】 「とへば」と「知らぬ」が対応、「たかつ(高津)」を「石見の国」で受ける。

【二句立】 まだ知らない石見国への旅だが、歌聖人麿が亡くなった石見国へ行くのだから、つらい旅とは言わないでおこう。

【現代語訳】（前句 尋ねればその名にまでも高い、高津の里という。）その有名な高津里のある石見国へ旅していくのだから、まだ知らぬ国への旅だが、旅がづらいものだとはいわないのだ。

（二折 表八） まだ知らぬ旅に石見国もうし

三〇 妻恋ふ袖も海となりけり 隆蓮

【式目】 恋（妻恋ふ） 袖（衣類）

【作者】 隆蓮

【語釈】 ●妻恋ふ袖 妻を恋しく思う、その涙が落ちる袖。「妻」は「(衣の) 褌」として、袖の縁語。「妻恋ふ」は普通は鹿に用いられる語句であり、人を主体とするのは異例。連歌においても、宗砌と専順の句集にしか用例が見当たらない。「妻こふと秋にしられてなく涙／ありて山田のほに出よとや」（宗砌発句并付句拔書・二六二五／二六一六・宗砌）。●袖も海となりけり 涙で袖が海のようになったことだ。「袖トアラバ、涙」（連珠合璧集）。「入ても苦し恋の山道／見るめなき潜きやせまし袖の海」（竹林抄・恋下・九二二・専順）。

【付合】 万葉歌「石見乃也 高角山之 木際従 我振袖乎 妹見都良武香（いはみのや たかつのやまの このまより わがふるそでを いもみつらむか）」（巻二・一三三二）から、「石見の国」に「袖」を付けている。『万葉集』では、この歌は「柿本朝臣人麿従^レ石見国^レ別^レ妻上来時歌」であり、妻と別れ上京する際のものである。また、石見の歌枕としては「石見潟」が詠まれるが、「稲見乃海（いなみのうみ）」を「石見の海」とした独自本文の歌「名にたかき石見の海の興つ波ちへにかくれぬやまとしまねは」（玉葉集・旅・一一七八・人丸）が『玉葉集』に見られ、正徹も「からくのみ石見の海のこと葉はかはらぬ磯の松のしほ風」（草根集・寄海恋・四六九七）と詠んでいる。「石見の海の変る

浪風／人心浦のあら塩松越えて」（竹林抄・恋下・九二八・心敬）。この連歌は、『心玉集』一三四一、『新撰菟玖波集』二〇五八にも入るが、『竹聞』の項には「恨恋に、みな石見の海をよめり、石見の海のうらみてもとよめり」と注される。「石見潟」の縁語であった「浦見」が縁付けられ、「石見の海」が歌語に加えられていく様がうかがえる。こうした状況から、付句の「海」も前句の「石見の国」と故ある語句となろう。

【二句立】 妻を恋しく思う涙が落ちて、私の袖もまるで海のようになってしまうた。

【現代語訳】（前句 まだ先の様子もわからない旅に出るのは、石見国だからつらいとは言うまいと思う。）妻を恋しく思う袖には、涙が落ちてたまり、私の袖はまるで海のようになってしまうたことよ。

（二折 表九） 妻恋ふ袖も海となりけり

三一 忍びぬる心の底は千尋にて 伝芳

【式目】 恋（忍びぬる）

【作者】 出芳

【語釈】 ●忍びぬる 恋情を押し隠している。●千尋 非常に深いこと。一尋は約一・八メートル。「君の御髪は我削がむ」とて「千尋」と祝ひきこえたまふ」（源氏物語・葵）。深い海の底を千尋の底というが、私があの人を思う心も海程も深いと表現した。本歌「いせのうみのちひろのそこもかぎりあればふかき心を何にたとへん」（古今和歌六帖うみ・一七五七）。また参考として「いはみがたちひろのそこもたとふればあさきせになる身の恨かな」（六百番歌合・寄海恋・九七四・寂蓮）。

【付合】 語釈であげた本歌により、「海」に「千尋」を付けた。前句で、涙によって、袖が海ほどおびただしく濡れてしまつたとしたのに対し、あの人を思い忍んでいる恋情は、海ほど深く秘めていてと、恋心の大きさを対に仕立てている。

【二句立】 恋しい気持ちを耐え忍んでいる私の心のその底は千尋程の深さであつて。

【現代語訳】（前句 別れてきた妻を思い流す涙で、私の袖も海のようにおびただしく濡れ）、恋情を押し隠している心のその底は千尋の海ほどの深さであつて。

（二折 表 一〇） 忍びぬる心の底は千尋にて

三二 なきが形見の竹のひとむら 心敬

【式目】 雑・哀傷（形見） 竹に草木（可嫌打越物） 竹與竹（可隔七句物）

【作者】 心敬

【語釈】 ●なきが形見 亡き人の形見。心敬の句集には、前句ではあるが「形見」という語句を含む句が見られる。「無跡にかたみの石をさざみ置／苔のみ深し山しなのみや」（心玉集・雑・一三九八／一三九九）。●竹の一むら 勅撰集では『玉葉集』、『風雅集』にのみ現れる表現。竹は人家の周囲にあり、人里の目印となった。「人のすむさとにやあらむやまものさきよりあまる竹の一むら」（俊光集・霧隔遠村・二四六）。

【付合】 前句の「千尋」に「竹」を付ける。これによって、恋から雑（哀傷）へ句境を転換した。「竹トアラバ、ちいろ」（連珠合璧集）。『伊勢物語』七十九段に、貞数親王誕生の際に、外祖父業平が「わが門に千尋ある影をうゑつれば夏冬たれか隠れざるべき」（広本系、真名本系は「影」ではなく「竹」と詠んだとの逸話が入り、後の延慶本『平家物語』、『源平盛衰記』等に受け継がれる。七十九段に関する正徹流の古注には「昔、稽相と云者、山に入て薪を拾ふに、峯に雪深き所に、鶏の啼声あり。行て見れば、巖窟あり。其中に仙人多く有、薬を合て服す。巖窟の内、曠々として限りなし。一本の竹あり。高き事限りなく、竹葉の間に日月出て赤く、仙人昇て葉に座す。彼竹に薬をかけたなり。葉より滴たる露嘗て、皆得「上寿を」、是を、千尋ある陰とも、千尋ある竹共云々。又、淑庭千丈竹と云事あり。淑庭と云者、仙道を好みし者なり。竹を植ければ、一夜に、千丈生のぼる事あり。かゝる仙境の事を思ひよそへて、此親王の、寿長く榮給はん事を讀り。」（伊勢物語奥秘書）と記す。

このような伊勢物語の理解を受けて、「千尋の竹」は正徹、正広が詠んでいる。(正広は「千尋のかげ」も詠んでいる。「岩に苔千ひろのかげを君ぞみんざざれにううる庭のざざ竹」(松下集・苔巖栽竹・五八〇)。「色かへぬ千ひろの竹の世々の門たかき柳もまゆひらく也」(草根集・門柳・二二三六・永享六年二月二〇日詠)。連歌の用例も多くはないが、「今年生の竹ともみへぬ千いろ哉」(園塵第四・二二五〇)、「雲の縁に似たる大空／いづくまで千尋の竹の栄ゆらむ」(明応三年二月聖廟千句第九何田百韻・八四／八五)等が見受けられる。

【一句立】 亡き人の形見となつてしまつた竹が、一むら生えているばかり。

【考察】 亡き人の形見の竹ということが極めて具体的に句の進行から浮いているような気がする。ひよつとして本能寺の誰かに対する追悼の句を織り交ぜたか。そのような目でみていくと、『洛中洛外図屏風』(町田家旧蔵本)の本能寺らしき寺には竹林が描かれている。

【現代語訳】 (前句) 亡き人を慕う思いをおしこめて耐えている私の心は、その底までは千尋の深さにもなつてしまつているよ。そして、あの人の無事を祈り、千尋の高さにまで育てと願われた竹は、今となつては、亡き人の形見の竹となつてしまつて、一むら生えているばかりなのだ。

【引用文献概観一覽】

式目の引用は京大本『連歌初学抄』(『京都大学蔵貴重連歌資料集一』(平成一三・臨川書店)による)。

『連歌新式追加並新式今案等』を参考として挙げる場合には、木藤才蔵『連歌新式の研究』(平成一一・三弥井書店) 所収太宰府天満宮文庫本によつた。

【語釈】 等における和歌の引用は断らない限り『新編国歌大観』による。『草根集』は日次本(『私家集大成五』(昭和四九・明治書院) 所収書院部蔵御所本)を使用し、詠歌年時がわかる場合には付記した。歌の理解に必要な場合には、『新編国家大観第八卷』所収の類題本(ノートルダム清心女子大本)の表現も付記している。連歌等の引用は、以下に示す諸本による。

連珠合璧集…『中世の文学連歌論集一』(昭和六〇・三弥井書店)

- 紫野千句：古典文庫『千句連歌集二』（昭和五三）所収静嘉堂文庫本　なお第二百韻は国際日本文化センター連歌データベースによる。
 小鴨千句：古典文庫『千句連歌集三』（昭和五六）小松天満宮本
 因幡千句：古典文庫『千句連歌集四』（昭和五七）所収木藤才藏氏蔵本
 表佐千句：古典文庫『千句連歌集四』（昭和五七）所収大東急記念文庫蔵本
 川越千句：古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収内閣文庫
 熊野千句：古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収静嘉堂文庫本
 葉守千句：古典文庫『千句連歌集六』（昭和五九）所収北野天満宮文庫本
 飯盛千句：古典文庫『千句連歌集八』（昭和六三）所収大阪天満宮文庫本
 文安四年八月十九日賦何人百韻：新日本古典文学大系『竹林抄』（一九九一・岩波書店）
 享徳二年二月四日何人百韻：廣大附属図書館蔵『さくらかひ』所収本
 享徳二年三月十五日何路百韻：古典研究会叢書第二期『連歌百韻集』（昭和五〇・汲古書院）内静嘉堂文庫連歌集書連衆百韻第十六冊所収本
 行助句：貴重古典籍叢刊一一『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角川書店）所収伊地知本
 行助連歌：貴重古典籍叢刊一一『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角川書店）所収天理本
 芝草句内発句：貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）所収本能寺本
 芝草句内岩橋上：『心敬集 論集』（昭和二二・吉昌社）所収本能寺本
 芝草句内岩橋下：『心敬集 論集』（昭和二二・吉昌社）所収本能寺本
 心敬僧都十体和歌：湯浅清『心敬の研究』（昭和五二・風間書房）所収神宮文庫本
 心玉集・心玉集拾遺：貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）所収静嘉堂文庫蔵本
 吾妻辺云捨：貴重古典籍叢刊五『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）所収天理図書館本
 基佐句集：静嘉堂文庫本
 看聞日記紙背連歌：図書寮叢刊『看聞日記紙背文書・別記』（昭和四〇・養徳社）
 産衣：『連歌法式綱要』（一九三六・岩波書店）
 壁草（大阪天満宮文庫本）：古典文庫『壁草（大阪天満宮文庫本）』（昭和五四）
 壁草注：古典文庫『壁草注・壁草（三手文庫本）』（昭和五七）

寛正百首：新日本古典文学大系『中世和歌集室町編』（一九九〇・岩波書店）

菟玖波集：金子金治郎『菟玖波集の研究』（昭和四〇・風間書房）

新撰菟玖波集：『新撰菟玖波集全釈』第一（第八卷（平成十一）十九・三弥井書店）所収筑波大学蔵本

連歌寄合：未刊国文資料『連歌寄合集と研究（上）』（昭和五三・未刊国文資料刊行会）

万葉集：小学館日本古典文学全集所収西本願寺本

かたはし：『中世の文学連歌論集三』（昭和六〇・三弥井書店）

竹林抄：新日本古典文学大系『竹林抄』（一九九一・岩波書店）所収巖島神社宮司野坂元良氏蔵本

竹間：貴重古典籍叢刊二『竹林抄古注』（昭和四四・角川書店）所収名古屋大学附属図書館本

老葉（再編本）：貴重古典籍叢刊二二『宗祇句集』（昭和五二・角川書店）所収毛利本

園塵第四：『早稲田大学蔵資料影印叢書 連歌集（二）』一九九三・早稲田大学出版部）

八雲御抄：『八雲御抄の研究 枝葉部言語部』（一九九二・和泉書院）所収国会図書館本

正徹物語：『歌論歌学集成第十一卷』（平成一三・三弥井書店）所収国文学研究資料館寄託久松国男氏蔵本

謡曲・氷室：新潮日本古典集成『謡曲集下』（一九八八・新潮社）

伊勢物語奥秘書：『伊勢物語古注釈大成第一卷』（二〇〇四・笠間書院）所収鉄心斎文庫蔵本

両山歴譜：『本能寺史料 古記録編』（平成一四・思文閣出版）所収日唱本

【参考文献】

金子金治郎『落葉百韻解説』（『連歌貴重文献集成第四集』（昭和五五・勉誠社）

伊藤敬『室町時代和歌史論』（平成一七・新典社）第四章「一条兼良―勅撰集の終焉―」

井上宗雄『武家歌合（康正三年）解説』（『未刊国文資料中世歌合集と研究（下）』（昭和四五・未刊国文資料刊行会）

桃井観城『金剛院日與上人について』（『桂林学叢』第一号・昭和三五・四）

糸久宝賢『本興寺・本能寺両山六世金剛院日与とその周辺』（『京都日蓮教団門流史の研究』（一九九〇・平楽寺書店）

高木豊『法華要文連歌小考―法華経和歌との関連と対比―』（『浅井円道先生古希記念論文集 日蓮教学の諸問題』（一九九七・平

楽寺書店）

稲田利徳『法華経序品和歌』と『武家歌合』（『正徹の研究』（昭和五三・笠間書院）

- 神作光一・長谷川哲夫『新勅撰和歌集全釈二』（平成一〇・風間書房）
- 荒木良雄『心敬』（昭和二三・創元社）
- 湯浅清『心敬の研究』（昭和五二・風間書房）、『心敬の研究 校文篇』（昭和六一・風間書房）
- 米原正義『戦国武士と文芸の研究』（一九七六・桜楓社）
- 酒井茂幸「文安・宝徳期の武家歌壇 能登守護畠山義忠と正徹」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第一三六集・平成一九）
- 島津忠夫著作集第五卷『連歌・誹諧―資料と研究―』（二〇〇四・和泉書院）「紹芳連歌」解説
- 山本登朗「千尋あるかげ」―伊勢物語七十九段をめぐって―（『磔』一八〇号・二〇〇一・一〇）